

序 文

アジア経済研究所長 宗像 善俊

1988年5月に、アジア経済研究所はAPDC（アジア太平洋開発センター）と共同して、「世界経済調整とアジア太平洋経済の将来」をテーマとするやや規模の大きい国際会議を開催した。その実績と経験を踏まえて挙行了たのが、今回のアジアクラブとの共催による国際シンポジウム「環太平洋経済の現状と展望—アジア・中南米比較—」（1989年7月25—27日）である。世界14の国・地域および国際機関における第一線の学者、有識者47名の参加を得、環太平洋経済の現状と将来について活発に議論していただいた。

このシンポジウムにはいくつかの特徴があった。まず、地域を環太平洋諸国に拡げ、アジアと中南米の参加者が一堂に会して対話の機会をもったことである。これはおそらく日本で初めての試みであろう。方法論的には、経済発展に比較の視点を導入し、特に80年代に顕著に現われたマクロ経済パフォーマンスの地域的差異に注目したことが重要である。当研究所自身では、福地崇生特別講師（京都大学教授）を中心に総合研究部の諸君が総力を挙げて作成した大部のアジア経済研究所論文において、環太平洋経済に関する研究所の統一見解を披歴した。また、88年の会議ではAPDCが海外招聘者との連絡の衝に当たってくれたが、今回はこれを含めて当研究所が会議運営の全てを担当した。

討議の内容を簡単に記すと、まず、(1)貯蓄率の高低、(2)貿易政策のありかた、(3)経済政策のスタンスの差、(4)労働力と技術吸収力の異同、等の諸点が、経済発展、特に成長率に重要な要因として強く関係することが指摘された。また、環太平洋地域協力に関する日本の役割に対して、大きな期待が寄せら

れた。さらに、中南米の今後の発展に関しては、債務問題を乗り切り、財政赤字等の内生的要因を収束できれば、同地域も持続的成長経路に徐々に戻る事が可能であるとの意見が提示された。

内外の多くの参加者の協力を得て成功裡に終わった今回の会議を顧みるとき、国際的な碩学、要人の意見交換センターとしての当研究所の機能も一段と強化された感がある。創立三十周年を迎える1990年には、国際シンポジウムも含めて、種々の記念事業が計画されているが、わが研究所のこうした国際的力もさらに充実するよう、一層努力していきたいものと考えている。

最後に、今回の国際シンポジウム報告者の1人であった糟谷晃氏（当時通商産業省通商政策局経済協力部長）には、公務で海外（サウジアラビア）出張中に不慮の事故に遭遇され、1990年2月6日逝去された。ここに深く哀悼の意を表し、ご冥福を祈る。